

保育現場での保護者参加型音楽イベントの 取り組み事例の考察 —ドラムサークルを活用した日頃のリズム遊びと 参観日での実践について—

永田実穂

**Considerations of Parent-Participation Music Events in Childcare Settings:
- Practices Using Drum Circles in Everyday Rhythm Play and Open Days-**

NAGATA Miho

キーワード：行事、ドラムサークル、リズム遊び、保護者参加型音楽イベント、表現

1. 研究背景と目的

保育現場では、運動会や発表会、音楽会など様々な行事が行われている。行事はその活動や過程を通して、子どもたち自身が達成感を感じられる場であるとともに、保護者や保育者にとっても子どもの成長を感じることができ、満足感を得られる機会でもある。

現行の3法令（幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領）の施行以降、行事のあり方や方法について、子どもの主体的な表現活動とするために各園での取り組みに少しずつ変化がみられるようになった。

従来型の劇発表や音楽会では、舞台（上演型）で発表するスタイルが多く、保護者に見せるための見栄えや聴き映えを重視する傾向がある。「見られること」を意識することから、子どもや保育者は上手にできるように、失敗しないように、また舞台上では「行儀よく」など過度なプレッシャーにつながる。無論、舞台発表自体を否定するものではなく、発表に至るまでの過程において、子どもの主体性に重点を置き、より自発的かつ積極的な気持ちになるよう、さらに、子どもたちが楽しんで表現することにつながるような仕掛けづくりが、保育者に望まれる援助ではないかと考える。

現在、筆者は先行研究¹⁾をもとに、複数の保育現場で園内研修としてドラムサークルを行っている。本稿は、その内の一園に注目し、園の日頃の取り組みであるリズム遊びやドラムサークルを通して、舞台上演型での音楽発表から参観日での保護者参加型音楽イベントへと変化した保育園の事例を取り上げ、その考察をおこなう。

2. 3法令より 感性と表現に関する領域「表現」（3歳以上）の内容⑥とその解説

3法令の施行後、それぞれの解説が示されその中で領域「表現」における内容⑥である。

内容⑥：音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう²⁾

内容⑥では、歌を歌ったり、日頃から園にある楽器や様々な素材に触れて音を出すことや音色を楽しんだりしながら味わうこととあるが、この解説では、保育者がどのような意識を持って歌や楽器と関わり取り組むのが良いかが、より具体的に示されている。

内容⑥における解説で筆者が重要だと考えるところを要約した。

- ・園生活では子どもが思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。
- ・正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、子ども自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである。そのためには、保育者等がこのような子どもの音楽に関わる活動を受け止め、認めることが大切である
- ・簡単な楽器が自由に使える場などを設けて、音楽に親しみ楽しめるような環境を工夫することが大切である。
- ・このような活動を通して、子どもは想像を巡らし、感じたことを表現し合い、表現を工夫してつくり上げる楽しさを味わうことができるようになる。
- ・大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、子どもが音楽に親しむようになる上で重要な経験である。

この解説から、保育者は子どもが様々な音に触れる機会や、音で十分遊ぶなどの環境を工夫すること、また正しく上手に歌うことや演奏することを目的とするのではなく、自由に楽器が使えるたり音楽が楽しめたりする活動を受け止めて認めることが大切だということが理解できる。

音楽発表会の前に、様々な楽器に触れる経験として楽器遊びを行っている園が多いと思われるが、行事の前だけでなく、日常の歌の中に楽器を取り入れる、自由に楽器に触れられる時間や空間を設けるなど、ちょっとした保育者の仕掛けで、子どもがより音表現を楽しむ機会が増える。

3. ドラムサークルを活用した園内研修

筆者は、2016年より山口市内の幼稚園や保育園において定期的にドラムサークルを活用した音楽あそびや園内研修を行っている。以前より器楽を活用した授業の中でドラムサークルを取り入れていたが、簡単に音が出る太鼓を自由に鳴らす音遊びとしてだけでなく、この活動の案内役であるファシリテーターの存在と保育者の在り方との親和性を強く感じ、保育現場での活用に有効性を感じたからである。

ドラムサークルとは参加者がサークル（輪）になって、ジャンベなどの太鼓や小物打楽器を使用して即興的に音楽を作っていく音楽活動で、幼保・教育現場だけでなく福祉施設での活動や、体験型のイベントなど様々な場で行われている。ファシリテーターがその場の様子に応じて、音楽的アイデアを提示したり場面展開したりするが、この活動は上手に演奏することや曲を完成させるといった結果を目的とせず、音遊びを通して楽しさや協同性を育むなど、その過程を大切にしている。

また、ファシリテーターは指導者という立場ではなく、その場をスムーズに交通整理する役割を担っており、主役である参加者のサポーター的な存在である。保育の場面でも、保育者は子どもの主体的な活動を促すきっかけづくりや支援を行うことが大切であることから、ファシリテーターとの関連性があると考えている。

子どもたちとのドラムサークルでは、アイコンタクトや、ストップ・スタート、強弱、コール

&エコー（模倣）などシンプルな合図を中心に、自由に叩くところ、みんなで一斉に合わせるところなど繰り返しながら進めていく。次第に声での指示よりも、ファシリテーターに注目したり周りを感じたりしながら合図を認識できるようになり、一斉に止まり、みんなが揃ったときの心地よさを共有しながら、「自由にどうぞ」「みんなでどうぞ」の掛け声で好きなように音を出す解放感を味わうことができる。

筆者がドラムサークルを行うときに重視しているのは、

『3つのわ』：輪（＝つながり）・和（＝笑い）・話（＝言葉・音での対話）である。

参加者一人ひとりとの対話・コミュニケーションを大事にし、ストレスのない和やかな雰囲気、全体のつながりを生み出していくこと、さらに幼児では、5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）との関わりを意識して活動に取り入れるようにしている。

例えば、「合図や口頭で示した数を太鼓（手拍子）で叩く」では、領域「環境」の「数」を意識し、年齢によって示す数字を変えていく。これは示された数字（回数）を叩くということだけでなく、音楽やビートの流れの中で言葉（数）に即時反応し、音にしていくことをねらいとしている。

また、朝食食べてきたものや好きな食べ物を一人ずつ聞きながら言葉をリズムに変え、それをみんなで叩く活動は「言葉」や「表現」に重きを置き、「みんなの前で話すことができる」や「自分で考えた言葉とリズムを発表する」ことをねらいとしている。

保育現場でのドラムサークル活動では参加人数分の太鼓（ジャンベ、トゥバーノ）やサウンドシェイプ、小物打楽器（振って鳴らす楽器、木や金属素材の楽器など）、シェイカーなどを準備するが、その日の子どもたちの様子から集中度や興味に合わせて使用する楽器を選ぶようにしている。したがって、ほとんど太鼓類を使わない場合もあるし、子どもが叩くのに疲れてきた様子が見られた場合には、クールダウンする内容のものを挟み平均的には約45分、年長クラスでは1時間を超える活動になる場合もある。

太鼓と太鼓の間にクールダウンとしてシェイカーパスという活動を行っている。シェイカーはマラカスのような楽器で、既製のものでは果物や野菜、卵型など様々な形があるが、お手玉やボール、あるいはドリンクタイプのヨーグルトの空き容器などの手作りのモノでも同様に遊ぶことができる。子どもたちはこの形と音が鳴ることに興味をもち、魅力を感じているようで、人気の活動内容である。

輪になり1人1個ずつのシェイカーを持って「自分の手、お隣さん、自分の手、お隣さん」と言いながら2拍子、あるいは4拍子のビートに合わせて右隣りの人に順にシェイカーを渡していく。3歳児クラスから少しずつ行うが、最初は隣に渡すだけとする。上手く渡せない場合は一人の子どものところにシェイカーがたくさん溜まり、ストップすることもある。

また、果物や野菜の形をした音の鳴るシェイカーが自分のところに回ってくるのが楽しい様子で、振って音を確認めたり、食べる真似をしたりするのでビートとずれることはしばしばあるが、ここでは正確さや上手にできることを求めているので問題としない。年齢が上がってくると、みんなで落とさないように、なるべく速く回せるようにと子どもたち自身に協働意識が芽生え、活動の内容が自然に変化していく。

このドラムサークル活動では基本的に子どもが危険な行為をしたり、楽器に対して乱暴な扱い方をしたりしない限り、音を楽しむことを優先する。様々な楽器に触れることで子どもから面白いアイデアや発音方法が出てくると、それが正しい使い方でもなくても皆で共有し試してみる。

また、幼児では鳴らすことが難しい楽器（「ささら」や「ラチェット」、「パフパフラッパ」など）は、ねじる、振る、押すなどいろいろ試して音を出すコツをつかむまで粘り強く鳴らす様子が見られる。最初から正しい使い方を伝えるのではなく、工夫しながら音を出す喜びも、活動の中で行っている。

以上のように、太鼓（ジャンベなど）を叩く活動だけではなく、様々な素材の楽器に触れたり、ゲーム的要素の強い活動を行ったりと、ファシリテーターはきっかけやアイデアの提供はおこなうが指導する立場ではなく、子どもの行っていることを受容し共有する役割を担う。

筆者がドラムサークル活動でねらいや意識をしていることを次のようにまとめる。

《音楽的視点から育みたいこと》

- ・太鼓の大きさや楽器の素材の違いから音の強弱、高低、音色、長短（長い音、休符、リズム）に気づくようにする。
- ・シェイカーパス活動を通して拍、拍子の認識ができるようになる（2拍子）（3拍子）
- ・自分なりのリズムを楽しむことができる（アイデア、表現）
- ・スタート・ストップを合図に合わせてできる。（集中してみんなでタイミングを合わせる、音のない静寂や一斉に止まった時の心地よさを感じる。）
- ・ビートに乗って楽しみ（身体を揺らしたり、太鼓の周りをジャンプしたりしながら叩く）、継続することでビート感を養う。
- ・コール&エコー、コール&レスポンス→聴いたリズムの模倣をする。コール&レスポンスは聞こえてきたリズムに対して自分なりのリズムを創作する。さらに、模倣を1小節分から2小節分と長いフレーズに伸ばし、長いリズムパターンを記憶する力につなげる。

《5領域とのかかわり》

- ・左右の認識（シェイカーパス）→スムーズにできるようになると反対方向、目をつむって隣の人に渡すなどを行う。（環境）（人間関係）
- ・音や動きを視覚、聴覚を使って模倣することができる。（健康）（表現）
- ・自分なりの考えや人とは違った表現ができる。（表現）
- ・シェイカーを振りながら、話すことができる。（言葉）（健康）
- ・言葉とリズムの共通性を感じる。（言葉）
- ・協力しながらシェイカーパスを行ったり、時間（速さ）を意識してドラムリレーを行ったりする。（環境、人間関係）
- ・みんなと楽しむことができる。（人間関係）
- ・言葉や音による伝えあいができる。（言葉、人間関係、表現）

ドラムサークル後の保育者との研修では、ドラムサークルの活動を通して普段と違った子どもの一面が見られたことや、ファシリテーターである筆者が行ったことにどのような意図があったのかなどを共有し、保育者の意識づけを図っている。

園内研修としてこのような活動を年に4回程度ではあるが、数年継続することで、保育者がファシリテーターとなって日頃の保育でリズム遊びの活動が行えるようになってくる。

4. 社会福祉法人育慈会「夢の星保育園 大内園」での保育者によるリズム・音遊び

本稿で紹介する「夢の星保育園 大内園」で、園内研修を行うようになって約6年になる。以前から他の系列保育園ではすでにドラムサークル活動を行っていたが、現在はすべての系列園で年に数回ずつ、リズム活動の園内研修を行っている。

園で人数分の太鼓を揃えることが難しいため、始めた当初は筆者所有の太鼓を園児の人数分（多い時は30個程度）持ち込んでいた。その後、数園が太鼓を購入し、今回取り組みを紹介する「夢の星保育園 大内園」でも9台のジャンベやトゥバーノ、さらにカホンなどの太鼓を所有す

るに至り、日頃のリズム遊びなどで活用している。

こちらの保育園では、未満児からすべてのクラスで月に一度以上日常の保育の中にリズム遊びを行うという方針があり、太鼓や小物打楽器、手拍子など、子どもの興味や発達を考えながら担当がリズム遊びを行っている。太鼓を使う活動の時は人数分の数がないため、1つの太鼓を2～3人で叩く、それでも足りない時はダンボールで代用するなど、工夫しながら取り組んでいる。

この取り組みは、音楽発表会直前に曲の練習をしたり楽器に触ったりするのではなく、日頃から少しずつ楽器やリズム遊びに触れる機会を設け、「楽器の練習」ではなく、遊びやゲーム的な活動を通してビート感を育んだり、協同的に楽しむことを目的としている。

以下枠の中は、3歳から5歳児クラスで担当が日頃行っているリズム遊び活動の内容である。

どのクラスでもシェイカー遊びを共通して行っており、同じシェイカーを使用しても発達に応じて活動内容が変化していることがわかる。

3歳（月に一度程度の活動）

シェイカー遊び

- ・シェイカーの形と一緒の果物や野菜の名前を言いながら、ビートに合わせて振る
→（保育者）「り・ん・ご はい」（子ども）「り・ん・ご」
- ・子どもの名前に合わせて振る
- ・「自分の手、お隣さん」と言いながら隣の子どもにシェイカーを渡す

太鼓

- ・保育者の真似をして叩く
- ・強・弱の合図に合わせて叩く
- ・自由に叩き、「ストップ」で止まる

その他

- ・曲（おもちゃのチャチャチャ）に合わせて好きなように鳴らす
- ・手拍子でリズムの真似をする

4歳（月に一度程度活動 1回20分程度）

シェイカー遊び

- ・隣の友達にビートに合わせて渡す 「自分の手、お隣さん」
- ・ビートに乗りながら、自己紹介を一人ずつしていく
「私の名前は〇〇です」「好きな食べ物は〇〇です」

太鼓

- ・自由に鳴らす
- ・保育者や友達のリズムの真似をして叩く
- ・強、弱、止まる、の合図に合わせて叩く
- ・音楽に合わせて叩く

その他

- ・手拍子でリズムを真似する
- ・歩く、ジャンプするなどの動きに合わせて手拍子をする

5歳（月に一度程度活動 1回20分程度）

シェイカー遊び

- ・隣の友達へビートに合わせながら渡す「自分の手、お隣さん」と言いながら（2拍子の拍）
- ・シェイカーの大きさや長さの違いで音が違うことを楽しむ

手拍子や太鼓

- ・保育者や友達のリズムを真似して叩く
- ・輪になって、輪の真ん中にある友達の足の動きに合わせて叩く
- ・保育者が輪の内側を歩き、歩く速さと競争しながらドラムを叩く
- ・音楽に合わせて叩く
- ・自由に叩く
- ・強、弱、止まる、の合図に合わせて叩く
- ・カホンを使用する時は、叩く場所で音が違うことを楽しむ

楽器

- ・タンブリン、トライアングル、マラカス、鈴を使用。それぞれの楽器の音色を聴いて違いに気づいたり、音楽に合わせてたりして自由に鳴らす

その他

- ・輪になって順番に手を叩いていき、輪の中を歩く保育者とどちらが速いか競う
- ・保育者が人形をもって人形と競ったりするような、視覚的にも楽しめるような工夫をする。この活動から、何秒でできるか、またいかに素早く手拍子を回すことができるかなど子どもたち同士での工夫や協同性が生まれ数字への興味にもつながる

月一回のリズム遊びとは別の活動

- ・トイレットペーパーの芯をつなげて、高低差をつけたものをいくつか用意し、床に叩きつけて音を鳴らし、芯の長さで音の高低に違いがあることを楽しむ
- ・担任のギターに合わせて歌う
- ・外遊びの中で、自然物（木の枝、葉っぱなど）と関わる中で葉っぱの擦れる音や枝がポキッと折れる音に耳を傾けたり、触れたりしながら身近な音を楽しむ

3歳児クラスでは、ビートに合わせてシェイカーの形の果物や野菜の名前などを言ったり、シェイカーを振ったりする活動が行われている。止まる時、自由に太鼓を叩くときなどの合図を繰り返し行うことで保育者への注目を認識する。この年齢は、協同的にみんなで目標を立てて行う活動は難しいため、まずは隣とのつながりや、保育者とのつながりを大切に、できることを少しずつ増やしていく時期である。

4歳児クラスでは、ビートに乗ってシェイカーを受け渡す、またビートに合わせて自己紹介をする活動が行われている。3歳児では最初隣にシェイカーを渡すこともままならないのだが、4歳児になると活動に慣れたこともあるのか、ビートに合わせて渡すことが可能になっている。

太鼓では音楽に合わせて叩く活動があり、曲調に合わせて叩くことや、太鼓だけでなく手拍子に合わせて歩くやジャンプをするなど、身体を使った活動も取り入れながらリズム遊びを行っている。

5歳児クラスでは、太鼓やシェイカー遊びだけでなく、トイレットペーパーの芯（廃材）などを使って長さの違いから音の高低について知ったり、叩く場所で音色が違うことに気づいたり音への興味をさらに広げるような保育者の関わりがみられる。叩く場所や叩き方によって音色が

違うことや、その違いに気づいて表現を楽しむことが大切であることから、生活の中で様々な素材に触れながら、音と十分関わるような活動がなされていると言える。

このように、継続してリズム遊びや音に触れる活動を行っていくことで、子どもの成長の様子がわかり、発達に合わせて保育者がどのようにサポートをすれば良いのかが見えてくる。

5. 「奏音祭」の取り組み

この園の大きな行事として、10月に運動会、2月には発表会がある。2月の発表会では劇発表を行っており、「披露する」「観てもらう」舞台発表の行事である。以前はこの発表会の際に合唱や合奏の音楽発表を行っていたそうである。

しかし、コロナ禍をきっかけに、会場に大人数で集まることや大きな声で歌うことの難しさがあり、密にならない発表方法がないか模索していたところ、園内研修で始まったドラムサークルを保護者と一緒にできないかということになった。そして、毎年3月に行われる参観日に保護者参加型の音楽イベントとして行うことになり、現在に至っている。

また、このイベント名を「奏音祭」とし、大きな音を出す、音楽を保護者と自由に楽しむことを目的とし、日頃の子どもの様子を保護者に伝える会にしたいという思いから「奏音」と「騒音」をかけて「奏音祭」となったそうである。

系列園の「めばえ保育園」でも「ドレミ会」という名称で、既に同様の取り組みが広がっているが、今回は、3歳児クラスから月に一回と継続的にリズム活動を行い、それらを活用して参観日に保護者と楽しむというプロセスに注目して研究を行っているため「夢の星保育園 大内園」での取り組みを事例として挙げている。

0歳～2歳児も少しずつリズム遊びが始まっており、筆者も2024年から年に一度研修を行っている。0,1歳児はリトミックの活動を12月に保護者と行い、2歳児は音楽的な発表などは行わないが、2月にCD劇発表を行うそうである。そして、3歳以上のクラスが2月に劇発表、3月には「奏音祭」として参観日に保護者とリズム遊びを行う。

筆者はこれまでに2023年3月の参観日の様子を見学させていただいたことがある。子どもたちは円になって椅子に座り、保護者の到着をそわそわしながら待っている。保護者が到着すると嬉しそうに「こっちこっち」と手招きしていた。なかなか保護者が到着しない子どもは不安な様子であったが、到着すると安心し、嬉しそうにしていた様子が印象的であった。子どもたちに緊張感はなく、保護者と一緒に行くことへの期待感と嬉しさを感じているようだった。

参観日の実践については、現在3歳以上の担任を持っている保育士と、現在担任ではないが、これまでの参観日で実践したことのある保育士の計4名から、当日の様子や普段のリズム遊びなどについてインタビューを行った。質問の内容は以下のとおりである。

- ① 参観日での子どもや保護者の様子など（満足感）
- ② 保護者参加型のこのような活動についてどう思うか
- ③ 子どもが普段のリズム遊びを楽しんでいると思うか？
- ④ 課題となること、日頃のリズム遊びを行う時に難しいと感じること

その他、リズム遊びだけでなく、日頃の音遊びの取り組みについても話を聞いた。

① 参観日での子どもや保護者の様子など（満足感）

- ・子どもたちはとても楽しみにしている様子で、保護者と一緒できて嬉しそうである。
- ・最初はみんなと一緒に行くことの恥ずかしさを感じた保護者もいたが最後には楽しかったようである。

- ・参観日の次の日の連絡帳で、とても楽しかったことが記入されていた。
- ・子どもの日頃の様子が見られてよかった。
- ・大人は普段楽器遊びなどを行わないので活動が新鮮だった。

② 保護者参加型のこのような活動についてどう思うか

- ・劇発表が別の機会であるので、このように保護者と一緒に楽しむ機会があるのはよいと思う。
- ・保護者も楽しんでいようである。
- ・和やかで、堅苦しい雰囲気がないのでよいと思う。

③ 子どもが普段のリズム遊びを楽しんでいると思うか？

- ・「えー、もう終わり」などの声が聞かれることがあるので、満足して楽しんでいると思う。
- ・もっと太鼓を叩きたいという声がある。
- ・リズム遊びが好きな子どもは多いように感じる。

④ 課題となること、日頃のリズム遊びを行う時に難しいと感じること

- ・特に課題や難しさは感じていない。
- ・楽器を好きなように鳴らしてよいと言ったときに、乱暴に扱う子や楽器を倒しそうになることがあり、楽器が壊れてしまいそうでドキドキすることがある。(どう注意したらいいか迷う)
- ・リズムや音楽活動が得意ではなく、以前はどのように進めたらいいか悩んだが、最近子どもと応答的に関わる中で余裕も出てきたため、難しさは少なくなった。
- ・遊びにどのように変化をつけたらいいのかが悩みである。(自分の引き出しが少ない)

2024年の「奏音祭」で、年長クラスは楽器遊びの他に、身体遊び「ボディパであそぼ」³⁾を行った時の話を聞いた。これは筆者が、園内研修の際に子どもたちと一緒に行った音楽遊びであるが、子どもたちはとても楽しかったようで、その後、日頃の遊びの中で何度も行っていたそうである。それを見ていた3歳児もやりたそうだったため、5歳児が教えている様子が見られた。そして、5歳児クラスではこの活動を参観日でも行おうということになり、保護者と一緒に盛り上がったというエピソードである。

園内研修では太鼓などの楽器を鳴らす活動の合間にブレイクとして、ボディパーカッションやリトミック的な活動を提案し、行っている。「ボディパであそぼ」は授業でも学生と一緒にっており、ひざ打ちや手合わせなど円になって2人組でする遊びだが、曲の最後でくると振り向いて、パートナーチェンジをする。この意外性や次に誰と一緒になるのかわくわくするようで学生も大騒ぎしながら楽しんでいる。

6. 保育士のインタビューから考察すること

「奏音祭」では、2月の劇発表で行ったセリフや表現を取り入れたり、子どもたちと保護者が競争するような音遊びを行ったり、あるいは日頃の好きな遊びを取り入れたり、それぞれの担当が工夫して取り組んでいる話を聞き、子どもも保護者もこのイベントを楽しみ満足していることが分かった。さらに、この活動は「成果」を求めていないため、子どもの負担は少ない。

一方、保育者は当日のプログラムを計画することや、特に経験の浅い保育者にとっては保護者を前に緊張感や不安感が生じるなど、ある程度の負担感があるのは事実である。しかし経験を積むことで、子どもとの応答的な関わりができるようになる、また自分の保育の引き出しも増える

ことから臨機応変さを身に着け、保護者とのより良い信頼関係を築く場となるなど、保育者の成長にも寄与するのではないかと考える。

また、保育者の負担という側面では、合奏発表であれば楽譜作りや子どもたちの練習、さらにピアノ伴奏の練習など、さらに大きな負担がある。もちろん学びもあり、負担を減らすことだけがよいとは思わないが、既に劇発表などで練習や発表する機会があるのであれば、このようなドラムサークル的な活動を取り入れた保護者参加型のイベントは、日頃のリズム遊びの延長として行うことができ、子どもの自然な様子を保護者に伝えることができるメリットは大きいと考える。

ところで、インタビューで挙げた課題として「楽器を好きなように鳴らしてよいと言ったときに、乱暴に扱う子や楽器を倒しそうになることがあり、楽器が壊れてしまいそうでドキドキすることがある。(どう注意したらいいか迷う)」があったが、これは外部ファシリテーターである筆者と、いつも子どもと接している保育者との立場の違いから出た課題であると考えられる。

先にも書いたが、ドラムサークルファシリテーターは基本的に事前に細かい注意や、叱るといったことは行わない。ただ、危険な行為をしたり、楽器に対して乱暴な扱い方をしたりしないように約束などを伝えることはあるが、なるべく楽器に自由に触って欲しい、いろいろ鳴らして試して欲しいという意識で接している。

したがって、筆者は「楽器はある程度壊れるもの」というスタンスで臨んでおり、敢えて壊してやろうという姿勢の子どもにはこれまで会ったことがない。楽しすぎてバチで叩きすぎてバチが折れた、振り回すのが楽しくてラチェットの歯車の部分が壊れたなど、想定を超えてしまうものではない。また、研修の振り返りにおいて、筆者がファシリテーターとして楽器遊びを行う場合、普段の生活では見られない子どもの様子や意外な一面が見えたなど話を聞くことがある。おそらく子どもは、外部ファシリテーターからは叱られない、自由な空間で行えると感じているからだと考えられる。

一方で保育者は指導的立場から、子どもに規範意識やモノを大切に扱うなど、表現すること以外に育てて欲しいこともあるため、どのように伝えるべきか悩むのではないかと考えられる。

これに対するひとつの提案として、保育者と子どもとの日常的な信頼関係を前提として、楽器の扱いについては、最初から制限したり正しい使い方を教えたりするのではなく、子どもと一緒にルールを決める、どうしたら素敵な音が鳴るだろうなど対話をしながら試すことで子どもの思考力や表現につながると思われる。

7. 今後の課題

輪になってシェイカーパスを早く正確に行うことや、ドラムリレーのように太鼓をなるべく素早く叩いて一周する活動は「落とさずにできた」や「速くできた」など一体感や達成感があり楽しいが、レクリエーション的になり、表現するという観点からずれる。そこに、「なるべく音が出ないように、「そーっと渡す」などがミッションとして加われば、どのように渡すと良いかを考え、身体の使い方を工夫する、耳を澄ますなど自分なりの思考や表現がみられるようになる。

また、学生や幼児と音遊びの一つとして円になり薄く広げた新聞紙1枚を音が出ないように順番に渡していく、反対に、新聞紙1枚から面白い音の出し方を工夫する音遊びを行うことがある。

どのように持ったら音を出さずに隣の人に渡せるか、反対にどんな音の鳴らし方があるか(ちぎる、はじく、くしゃくしゃにする、吹いてみるなど)を自分なりに考えて音を出す場合、思いも寄らない表現が出てくる。人の真似をしてみる、今までの人とは違う方法で鳴らしてみたいなど、自分なりに工夫して行うことが、既に表現である。ゲーム的な活動であっても、子どもの思考や感じたことなどを音遊びに入れることで、十分、表現する活動となる。

さらに、園内研修では、日頃から歌っている曲やお気に入りの曲を子どもに聞いて、筆者のピ

アノに合わせて太鼓を叩くことがある。例えば「ジャンボリーミッキー」では、思い切り好きなように拍打ちや自分で思いついたリズムを叩く子どもがみられる一方で、「にじ（作詞：新沢としひこ／作曲：中川ひろたか）」のようなしっとりとした曲では、指先で優しく音を出したり鼓面をさすったりしながら曲に合うように工夫して音を出す様子が見られる。さらに、メロディのリズムに合わせて静かに叩く子どももおり、自分なりに曲調を感じとって鳴らしている。この場合、前出した内容⑥の解説にある「楽器を正しく上手に演奏すること」ではなく、音楽に合わせて自由に音を出す、即興的に楽しむ活動であり、決められたリズムを練習するものとは異なる。

「このメロディにはどんな楽器がいいと思う？」「このフレーズにはどっちのリズムが合うと思う？」などの保育者からの問いかけや応答的なやりとりが行われるとしたら、それは子どもがやってみたいと思える主体的な活動へつながる。

「奏音祭」は日頃の保育者のリズム活動や音遊びを3歳児から続けるというプロセスや保育者のリズム遊びに対しての意識や積み重ねがあるからこそ、5歳児では活動が展開している。また、ゲーム的な活動にとどまらず、保育者のアイデアや子どもとの応答的なかわり次第ではさらに表現を工夫してつくり上げる楽しさを味わう活動になっていくと考える。

領域「表現」の授業において、行事についてのメリットとデメリットについてグループディスカッションを行った際に、以下のような意見が出た。

メリットとして考えられること

- ・ 行事を通じて保護者同士のかかわりができる
- ・ 練習を重ねることで継続的な力や頑張る力がつく
- ・ できたこと、達成感で自信がつく
- ・ 観に来てくれたことで喜びを感じることができる
- ・ 思い出作りができる
- ・ 保護者が子どもの成長を知ることができる

デメリットとして考えられること

- ・ 結果を求めることで発表の際に個人差が見えてしまう
- ・ 保育者の負担が大きい
- ・ 練習のため自由な活動（自由あそびなど）の時間が減る
- ・ 苦手意識を生じる子どもがいる
- ・ 結果重視を求められるため、自分が考えていたこと（子ども主体の活動など）が曲げられてしまうのではないかと（上司、保護者からのプレッシャー）
- ・ 見栄えを気にして、保育者主導になってしまう

行事についてはメリットも大きいですが、一方でデメリットとして考えられることもある。それらを軽減するためには、日頃の保育の中で子どもと応答的に関わるとはどういうことなのか、また子どもの遊びをどのように発表会などと結び付けていくのかを事例⁴⁾を通して考え、ディスカッションを行った。しかし、行事の在り方や方法については園の方針もあり、園に所属する一個人の保育者として、行事を変化させることは難しいが、保育者は結果重視だけでなく、子どもと応答的に関わるプロセスが大切であること、そしてそのプロセスを保護者とも共有し理解してもらうことが重要であると考えた。

今回の研究では、日頃の取り組みであるリズム遊びやドラムサークルを活用して、舞台での音

楽発表から参観日での保護者参加型イベントになった保育園の事例を考察した。子どもにとっては遊びの延長なので負担がなく、保護者にとっても普段の子どもの様子が見ることができ、舞台発表とは違った子どもの成長が見られ、保護者も一体感や楽しいと感じている人が多いと分かった。

達成感や満足感は、できたこと、頑張ったこと、認めてもらえたことだけでなく、その空間や時間を一緒に楽しく過ごした、自分なりの表現や楽しさを味わえたことでも得られる。舞台発表では「やらされている」と子どもが感じず、「みんなのできるまで頑張った」「工夫してみんなで楽しくできた」という意識が加わるとことで、さらに大きな達成感や満足感が得られるのではないだろうか。

今年度も「夢の星保育園 大内園」では3月に「奏音祭」が開催され、筆者もその様子を見学させていただく予定である。園内研修で関わっている子どもたちの成長、またファシリテーターとして子どもたちや保護者の前で奮闘する保育者の姿を楽しみにするとともに、自分の行っている園内研修の課題も見出しながら、研究を続け授業に反映させていきたい。

謝辞

この研究を行うにあたり多大なご協力をいただいた「夢の星保育園 大内園」の福永翔園長をはじめ、インタビューに応じてくださった保育士の皆様に感謝し、謝辞を申し上げます。

参考文献

- 1) 永田実穂 (2018) 「領域『表現』においてドラムサークルを活用した幼児のコミュニケーションと音楽表現～5歳児におけるドラムサークルの実践とその考察～」『山口芸術短期大学研究紀要』第50巻
- 2) 幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
- 3) 細田淳子 (2006) 『わくわく音遊びでかんたん発表会 手拍子ゲームから器楽合奏まで』すずき出版
- 4) 吉永早苗 (2022) 編著 『子どもの活動が広がる・深まる 保育内容「表現」』中央法規